
こなはなし

まめご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんなはなし

【Nコード】

N6479T

【作者名】

まめご

【あらすじ】

短編集みたいな、中編もあるみたいな、シリアスなのかみたいな、コメディもあるじゃないかみたいな、ごった煮みたいな、そんなお話たち。

夢の連鎖 1・シエナの場合

強い風が吹いた。

シエナは身を低く保ち、手綱を握り締めてやり過ごした。長い空色の髪が靡いて、耳飾りがチリチリ鳴る。背に乗せている主人の意を汲んでか、それとも自然の摂理か、クルルカはその風をうまく利用して気流に乗った。空に点在する浮島の間を縫うようにクルルカを操る、この時間がシエナは好きだった。

ヒュウヒュウと耳元で風が鳴る、心が逸る。もつと遠くへ、果てしなく遠くへ行ける気がする。

「おい、シエナ！ この馬鹿娘！」

後方から男の怒鳴り声が聞こえた。

「いつまでも遊んでんじゃねえぞ！」

「分かっているってば、レイズン！」

シエナも負けじと怒鳴り返した。獲物はすでに見つけている。シエナの目の良さは村一番を誇る。

「サドン島の陰にワツパの群れを発見！ いくわよ！」

目指す浮島の位置を確認すると、クルルカの手綱を右に引いて体重を傾けた。クルルカは得たりとばかりに羽を止めて、急旋回する。全体重をかけている^{あぶみ}鐙に力を入れつつ、鞍に付けていたドンキを素早く取り出した。レイズンもシエナに^{なら}倣う。

風下にいる為、ワツパの群れはまだシエナたちに気が付かない。風が止んだタイミングを逃さずに、シエナは勢いよく回していたドンキをワツパの群れめがけて放った。

ワツパたちは慌て騒ぎだしたが、時すでに遅し、次々と繰り出されるドンキにぶち当たり一羽、二羽と悲しげな悲鳴を上げながら地上へ落ちていった。

「こりやしばらく狩りに出なくていいな」

草原に転がるワツパを器用に束ねながら、レイズンが嬉しそうに言った。レイズンが嬉しいとシエナも嬉しい。でもそれを正直に出すのは、なんだか気恥かしい。回収したドンキを鞍に取り付けた革袋に入れ終えて、大人しくうずくまっているクルルカの首に唇をそつと当てる。ひんやりとした子竜独特の鱗の感触がした。

「お前もよくがんばったね」

キュウルルー、とクルルカが甘えた声を出す。本当はレイズンの首にもこういうことをしてみたいのだけど。したらとても気持ちが良いと思うのだけど。そう思うだけで顔が熱くなる。何でだろう、最近までちつともこんなんじゃないかったのに。狩りはともかく、どんな話をしたらいいのか話題にも困る。

——ああ、そうだ。今朝見た夢の話しよう。わたしは全然違う少女になっでいて、奥深い山道を歩いていた。楽しそうに夢の話をするにして、その先についた山小屋にいた男の人にもした。その人は私たちの持つてきた草を調査して見たことのないような、美しい色の雲を作った。あれはなんという葉なんだろう。レイズンなら薬草にも詳しいから分かるかな？

「おい、シエナ。いつまでそうやっている気なんだ。帰るぞー」
当の本人の呑気な声が聞こえる。シエナは慌てて返事をして、クルルカにまたがった。

草原は静かに風の歌を歌っている。

夢の連鎖 2・比沙子の場合

「ほんでな、その後な、村に帰って——あ、なんか森の中の崖つぶちみたいな所でほんまに、ザ・村って感じの所やってんけど。小さなおっさんに褒めてもらえてすごく嬉しかったんよ」

朝っぱらから怒涛の勢いで話す比沙子はトーストにバターを塗りたくったあと、うつとりした顔で口に入れた。

「小型恐竜で空を飛ぶのは、めっちゃ気持ちよかった……」

「俺かて空飛ぶ夢見たことあるけど」

比沙子の横でトーストに目玉焼きを苦心してのせている兄が言った。
「いっぺんも気持ちいい思ったことないわ。怖いばかりで」
うふふん、と比沙子は意地悪そうに笑う。

「そりゃ兄ちゃんは臆病やもん。前かて部屋のドア開けただけで、『キャッ』って。乙女の悲鳴か。『キャッ』って」

「なんやとこら。俺あデリカシーの欠片もないアホ妹にびっくりしただけやぞー！」

「はいはい、あんたら。夢の話も喧嘩もええんやけど」

兄妹の前で新聞広げていた母が呑気に仲裁した。

「時計みてみ」

比沙子と兄は同時に時計を見て、それこそキャッと叫んだ。

「お前がろくでもない夢の話なんぞするよってに！」

「兄ちゃんが乙女やから悪いんやろう！」

「誰が乙女じゃ、ワレボケカス！」

罵りと咀嚼を激しく繰り返した二人は慌てて朝食を終え、同時に家から飛び出した。

「いつてきまゝす！」

「あの子ら、食器も下げんと……。ほんま親の顔が見てみたいわ」
母は溜息をつく、よっこらせ、と腰を上げた。

比沙子は夢をよく見る。起きた時は大抵その断片がぼんやり残っているだけだが、たまにはつきりとフルで覚えていることもある。

「そらちゃうでえ」

友達の結希はおつとりと否定した。読書家で色んなジャンルを無差別に読破しているので知識が豊富で頼りになる。

「人間ってな、夢の1%か2%しか覚えられへんねんで。だからどんなにすごい夢みても、ちみっとしか覚えとらへん訳。最初から最後まで全部覚えとったら、もしかして人間って狂うてしまいかもしれへんな」

へえー、と感心しながら、比沙子は心の中で「でも」と思った。でも、わたしはいろんな夢を覚えている。ある時は子竜に乗って空を駆け、ある時は老人になって軍会議で熱弁をふるい、ある時は庭園の池に映る月を眺めながら愛しい人を想い、切なげに溜息をついた。それが全て比沙子自身ではない。そこに普通に暮らす人たちの心の中に自分の魂の欠片が入るような感じ。その人たちに同調して喜んだり、悲しんだり、胸を痛めたりする。まるで違う人の人生に少しだけ繋がっているみたいだ。

だけど、昨日のシエナの夢は楽しかった。狩りの時は男勝りのくせに、終わった途端にレイズンにドキドキしちゃうなんて、かわいすぎる。うまくいくといいな、あの二人……まあ、レイズンは鈍感っぽいから苦勞しそうだけど。

クスクスと比沙子は思い出し笑いをしながら、地下鉄の階段を下りた。

夢の連鎖 3・翠緑の場合

霧けぶる竜護仙^{りゅうごせん}、かろうじて判別できるような道を二人の少女が歩いている。一人は黒い結髪に簪^{かんざし}をさした少女で、もう一人はもつと幼い。その幼い少女は先程から澄んだ声で隣の姉に熱心に語っていた。

「洞窟はとても整っていて、天井から明かりが煌々と灯っていました。床はどこもかしこもツルツル光る石で覆われていて、多分、大府さまのお屋敷のような大理石だと思います。どんどん下りていて、わたしは何かを待っているのです」

「まあ、翠緑^{ツイリユー}は一体、何を待っていたのかしら」

姉は優しく翠緑に微笑みかける。

「竜です」

妹は敵かに言った。

「暗闇で竜の目が光りました。でもわたしは動じません。それが当たり前のように目の前に来るのを待っているのです。銀色のとても美しい竜は静かに滑りこんで、止まりました。そして、あるうことがフシューッと音がして、竜の胴体が開いたのです！」

まあ、と姉は再び微笑んだ。先程から翠緑は昨日見た夢を興奮状態で話している。夢中になって、あどけない頬を桃色に染めて。

「それも一つだけではありません。きれいに規則正しい間隔にある扉が、すべて同時に右と左に勝手に開いたのですよ、姉さま！」

「とても素敵な夢を見たのね」

「はい！ あつ、尊師^{せんせい}のお家が見えました」

獣さえも迷い込まないような山奥、掘立小屋に近い家がそこにあった。主は尊師と呼ばれる、おじさんと呼んでいいのかお兄さんと呼んでいいのか判断しかねるような年頃の男で、薬師^{くすりし}を生業として生計を立てている。少々変わり者かもしれない。当代随一の薬師が弟子も取らず、こんな山奥に引っ込み、おまけに鬻すら結っていない。

横で姉がさりげなくおくれ毛を整えた。十六になって結髪を許されてからは、銀の簪を一本付けている。求婚する男は多かったから、金銀瑠璃珊瑚、様々な簪が贈られたが、姉は頑なにこの燻銀の簪しか頭に付けなかった。翠緑はそれが誰から贈られた物か知っている。「お久しぶりでございます、尊師」

姉は手にしていた籠を横に置くと、膝をついて両手を組んで額に付けた。翠緑も同様に礼をする。

「久しぶりだね。御母堂は健在かい」

「ええ、お陰さまで、畑に出られるようになりました。ありがとうございます」

尊師はゆつくりと笑うと、二人の為にお茶を入れてくれた。香り高い茶色の液体が入った椀を翠緑の前に置いた尊師の手は、大きくて筋張っていた。この人はこの手で、姉にどういう風にふれるんだろう。翠緑はぼんやりとそんなことを思う。

「お礼をちゃんとと言いなさい」

姉に小声でたしなめられて、翠緑は慌てて礼を言った。尊師はゆるりと微笑んだまま頷いた。

一息ついた所で、翠緑と姉は薬の調合を手伝った。といっても、幼い翠緑に出来ることは少なかったが、何度も見えてきているので、自分が何をすべきかは分かっていた。まず、尊師が翠緑たちの持ってきた薬草と他の様々な実や草の茎を燻す。卓の上で慎重に、万全を期して。やがて草からもわもわと煙が立ち上る。最初は灰色だった煙は次第に虹色になり、煙というよりはやや鈍重な雲といった風情でふわふわと燻されている草の上に溜まりだす。

尊師と姉は器用にその雲の一篇を指に絡みつかせて掬うと、縦長の細い人差し指ほどの容器に入れてゆく。容器の中で蒸気の塊は「チリチリチリ」と僅かな音を立てて桃色の結晶へと姿を変えた。この一粒二粒の薬の値段を聞いて、翠緑は腰を抜かしたことがある。そんなに高価な物ならば、尊師は都の一等地に御殿を立ててもなお有

り余る金貨を持っている事になる。

「まあ、わたしは都が嫌いだから」

どこか寂しそうに尊師は言った。

チリチリチリ、と手の中で結晶が音を立てる。翠緑はこの音が大好きだった。暖かな静寂と微かな水晶だけが降り積もる中、翠緑が「あの」と顔を上げた。一番神経を使うのが薬草の調査で後は単純作業だから、話しかけても大丈夫だろうと判断したらしい。

「今朝見た夢の話を聞いてくださいますか」

「この子、よほど愉しい夢を見たようで。今日も道中、そればかり」

姉が苦笑して、尊師も促してくれた。

「どんな夢をみたのかね」

翠緑は嬉々として話し始めた。兄らしき人物と言いあいをしている事、朝餉だろうそれは得体のしれない形状だった事、驚いたことに自分は年長者に対してぞんざいな口をきいている事、不思議な着物を着ている事、整備されすぎて愛想のない洞窟の地下へ下りていった事、滑り込んできた銀の竜――。

「わたしは平然と竜の中に入りました。わたしだけではありません、たくさんの方が乗っているのです。竜の中は……生き物という感じが全くなって、細長いお部屋が繋がっているようでした。でも、すごい速さで動くのです。ですから生きているのだと思います。不思議だと思いませんか」

「確かに物体が意思を持って動くことはない」

しゃべりすぎてうつすら汗をかいてきた翠緑を可笑しそうに見ながら尊師は言った。

「進化した馬車かもしれないな」

「お馬は竜をひいてませんでした！」

「それは失礼した」

むきになる翠緑に尊師は素直に謝った。

「もしかしたら、翠緑は寝ている間に、異次元の扉を開いたのだろ

う」

「いじげん？」

聞きなれない言葉に翠緑はきよとした。

「ここではないどこか違う世界があるということだよ。遠い未来かもしれない。遠い昔かもしれない。そして遠い星かもしれない。それとも」

尊師は虹色の雲を「三」の字に分けた。雲は律義に「三」のままにフヨフヨと漂っている。

「同じ時間枠で、全く違う世界が平行線で展開している可能性だつてある。きつと夢は現実よりもその不思議な異次元により近いものではないかな。夜になれば彼方かなた此方こなたの扉が開き、我々の魂はそこで生きる誰かの人生にしばしの間寄り添う。朝になれば己の器に戻り、何事もなかったように日常を送る——」

「尊師、尊師」

朗々と語っていた老師の声を姉が遮った。

「翠緑が目を回しております」

翠緑には少し難しかったらしい。キュウと卓に撃沈してしまった。ちなみに老師は夢を見ないという。

「見ているのかもしれないが、そんなに執着がないのだろう、すぐに忘れてしまう」

姉も同様だといった。

「それは少し寂しいですね」

首を傾げた翠緑は知らない。二人がこっそり目配せをして微笑み合ったことを。

二つ目の太陽が落ちて、竜護仙は柔らかな闇に包まれ始めていた。

ミドリちゃん

こうなったら相撲よ！ あたしと勝負しなさい！」

ミドリちゃんは足を開いて踏ん張ると、びしりと人差し指をあたしに突き出した。

「絶対に嫌」

あたしは丁重に断った。

ミドリちゃんは河童だ。夏休み恒例の田舎に帰った時、祖父に連れて行ってもらった天竜川で知り合った。衝撃の出会いだった。

水で冷えてトイレに行きたいと申し出たあたしに「川の中かその辺でしょ」と祖父は言った。川中で撒き散らして従兄弟や兄に迷惑をかけるのは嫌だったので、あたしは川を渡って向こう岸の藪の中へ入っていった。

そこで不思議なものを見た。薄緑色の奇妙な生き物が、まるでシャツを脱ぐような格好で固まっている。驚いたようにこちらを見ている。あたしもその生き物を見つめ返した。昔話の本の挿絵で見た河童とそっくりだ、もしかして河童？……と思っているうちに河童が泣き出した。まさか、いきなり泣かれるなんて思ってもいなかったから驚いて、「どうしたの？」と聞くと「脱皮しているところを人間に見られた、もうお嫁にいけない」というようなことをしゃっくりの合間に河童は語った。偶然とはいえ、非はあたしにある。

「ごめんね、ごめんね」何度も謝ると、ようやく河童は泣き止んできた。

それからしばらく話をした。河童は脱皮後のぐんにやりした皮を手握っていて、あたしの尿意はあまりの奇想天外な展開についてゆけず消えていた。

彼女（お嫁にいけないというのだから女の子だろう）はここに一人（匹？）で住んでいる河童で、人間に会ったのはあたしが初めてだ

と言った。あたしも河童に会ったのは初めてだ。もつと怖い妖怪だ
と思っていた。祖父が悪戯をしたあたしたちを怒るとき「天竜川に
沈めて河童に尻こ玉ぬいてもらうつぺ！ ええな！？」と怒鳴るか
らだ。なに河童って？ なに尻子玉って？ というクエスチョンマ
ークは彼方に飛んで、あたしたちは恐ろしさのあまり「ごめんなさ
い！」「もうしません！」とひれ伏した。

横にいる河童の女の子は怖そうな気配など微塵もない。脱皮したて
の柔らかそうな薄緑の肌に、キラキラ光る水をためた頭上のお皿、
思わず引つ張りたくなる黄色いアヒル口（河童だけど）、キユンと
つりあがった目は好奇心で輝いている。

「ねえ、名前はなんていうの？ あたしは幸甚あまね小学校三年生の天音
みき」

困ったような顔で河童は俯いた。

「名前なんかないもん……」

「じゃあ、あたしがつけてあげる、……ええと、ミドリちゃんなん
てどう？」

適当に思いついた名前だけど、それは彼女にとってもよく似合ってい
た。ミドリちゃんもお気に召したらしい。パアツと明るい顔になっ
て嬉しそうに笑った。

「ミドリちゃん」「みきちゃん」

あたしたちはクスクス笑って、繰り返しお互いの名前を呼び合った。
大岩の上で足をブラブラさせながら。

遠くで兄たちがはしゃぐ声が聞こえた。

それから東京に帰る日まで、祖父にねだってほとんど毎日、天竜川
につれていってもらった。祖父はあたしたちを軽トラの荷台に乗せ
て運転する。おまわりさんに見つからないように隠れたりするのは
スリルがあつたし、車内では味わえないダイナミックな振動にはし
やぎながら、あたしたちは荷台を楽しんだ。ドナドナを合唱して売
られた子牛の心境にもなったりした。

天竜川に着けば、従兄弟たちや兄はターザンごっこ（川の上の木からロープが垂れ下がっていて、勢いをつけて川に落ちることが出来る）や滝つぼの飛び込みに夢中になって遊び、あたしとミドリちゃんは大岩の上でのんびり日向ぼっこをしながらその様子を眺め「男ってガキよね」と批評した。

時々、もってきたゾウさんのプラスチックのじょうろで、ミドリちゃんの頭に水をかけてあげた。ミドリちゃんは気持ちよさそうに目を細めて、お礼を言った。

「河童は特別きれいな水じゃなきゃ、生きていけないんだよ。日本にそういう所って少なくなってきたから、あたしはともラッキーなんだ」

あたしが教えてあげた言葉を使うときのミドリちゃんは少し得意げだ。

「じゃあ、あたしたちが出会えたのって、奇跡なんだね」

「奇跡ってすごいねえ」

そっくりあってあたしたちは二人の友情を誇らしげに思った。

東京に帰る前の日、あたしとミドリちゃんは抱き合って別れを惜しんだ。

「来年、また来るからね。待っていてね」

「絶対だよ？ 絶対だよ？」

ミドリちゃんの体はくんにやり柔らかくて冷たくて、水のひそやかな甘い香りがした。

ミドリちゃんが仰天発言したのは、あたしが中学１年生の時でもう二人は親友といていいほどの間柄になっていた。

「みきちちゃんの尻小玉がほしいの」

あたしはびっくり仰天して寝そべっていた大岩から身を起こした。

「それは駄目だよ」

ミドリちゃんと知り合って、あたしは河童の本を読んだり、祖父に

話を聞いたりした。尻小玉は河童が人間の肛門から抜き取る魂のことである、と知った。魂なんて抜き取られたら、あたしは死んでしまっじゃないか。冗談じゃない、ミドリちゃんは大好きだけどあたしはあたしの人生がある。東京に好きな男の子だっている。

「だって、ものすごくほしいんだもの」

そういうミドリちゃんの顔はうつすら上気していて、あたしは心底、困ってしまった。

「あのさ」

念には念を入れてあたしは聞いた。

「人間って尻小玉抜かれたら、どうなるの？ 死んじゃうの？ そもそも尻小玉ってどんななの？」

「尻小玉は、丸くてキラキラ光ってとてもきれいな。抜かれた人間がどうなるかは知らないわ。だって誰も教えてくれないし」

ジーザス！ とあたしは異国の神の名を心の中で叫んだ。

「でも、大丈夫。そしたらいつでも一緒にいられるよ。いつもみたにお別れしなくていいんだよ、ずっと一緒にいることができるんだよ」

「嫌だよ」

「みきちゃんは、あたしと一緒にいたくないの？」

「そうじゃないけど、やっぱり嫌だよ」

「みきちゃんの分かんちん！」

ついにミドリちゃんは怒り出した。冗談じゃない、怒りたいのはこっちの方だ。

「こうなったら相撲よ！ あたしと勝負しなさい！」

あたしが勝負を辞退したのは意気地がないからではない。ミドリちゃんはそのごく怪力だ。10キロくらいある石なんて、片手で持ち上げてクルクル回せるほどだ。そんなミドリちゃんと自分の命を賭けて勝負なんかできるものか。コンジョーでなんでもかんでもクリアできると思ったら大間違いだ。

タイミングよく、あたしを呼ぶ祖父の声が聞こえた。そろそろおうちに帰る時間なのだろう。

「明日」

仕方なしに、あたしは言った。

「明日、必ず」

ミドリちゃんは無言で頷いただけだった。

勝負を延長したものの名案などあるはずがない。にっちもさっちもいかなかったあたしは、夕食の後、酒を飲んでゐる祖父に相談した。従兄弟たちと兄はテレビを見ている。かしましく笑う彼らに本気で腹が立った。呑気な奴らめ。

「おじいちゃん」

「うん？」

「河童と相撲をとって、絶対に勝つ技ってないのかな」

「ある」

とあっさり祖父は言って、「ごによごによあたしの耳にその必勝法をささやいた。

「えー！」

あたしはのけぞった。

「でも、それって卑怯なんじゃあ……」

「んなことあるかい。真剣勝負じゃ、どんなことしても勝ち残るんじゃないあー！」

酒臭い息を振りまきながら腕を振り回していた祖父だったが、ふと真顔になった。

「なんじゃ、みき。河童と相撲とるんか」

あたしはあいまいに笑って、おつまみのサキイカに手を伸ばした。その夜、夢を見た。

静かな暗闇の中で、土色に変色した自分が横たわっている。とても悲しいのに声はでないし、体も動かない。悲しさはどんどん増してゆく。となりにミドリちゃんがぺたんと座っていた。きれいな虹色

に光る小さな玉を両手で掲げて、うつとりと見入っていた。気持ち
が悪いほど美しい夢だった。

「勝負は一回こっきり」

砂州に片足をひきずって円を描いているあたしに、ミドリちゃんは
言った。遠くから兄たちが遊んでいる声が聞こえた。ワーワーキー
ー猿みたい。妹が命を欠けて相撲に挑もうとしているのに、どこ
まで呑気なんだ、と殺意まで沸いた。

「円の外に出たものが負け。それでいい？」
「いい」

ミドリちゃんがゆっくり円の中に入ってくる。あたしより小さいく
せに、ものすごく大きく見える。初めてミドリちゃんが怖いと思っ
た。でも、絶対負けられない。

「では」

あたしも円の中に入って、ミドリちゃんと向き合った。

「礼」

そう言つて深々と頭を下げる。つられてミドリちゃんも頭を下げた。
そのとたんに頭の皿からザーッと水が零れた。

「構えてえ」

あたしは知らんぷりをして腰を落とす。ミドリちゃんもフラフラに
なりながら構えた。

「はっけよい、のこったあ！」

フラフラしたままのミドリちゃんをかかえ、あたしは思いつきり円
の外に投げ飛ばした。

頭の皿の水がなくなると河童は力を失う、と祖父は言った。だから
相撲をとるときは、礼をしてその水をこぼせ、と。事実力を失った
ミドリちゃんは、勢いあまって葦の藪に飛んでいった。

「きゃあああ、大丈夫!？」

慌てて駆け寄ると、ミドリちゃんは蒼白な顔をして起き上がった。
体がフルフルと震えている。

「ミドリちゃん……」

「……い」

頭に手を当てて、俯いたまま、ミドリちゃんは低い声で言った。

「みきちゃんなんて、大嫌い！」

言葉の出ないあたしを残して、ミドリちゃんはフラフラと葦の中へ姿を消した。いくらよんでも、姿を現さなかった。

その日から、あたしは四十度の熱を出して生死の淵をさまよった。

ミドリちゃんの呪いだと思った。

それからしばらく、田舎へは帰らなかった。やれ受験だ、やれ夏期講習だ、やれ旅行だ、やれサークルだと忙しく過ごしている内に時間は流れて、大学2年の夏、祖父が亡くなった。7年ぶりの田舎は全く変わっていなかった。山も、田んぼも、どっしりした大きな家も、昔からここにあるのが当たり前、というような顔であたしたちを出迎えた。

変わったのは人間の方だ。従弟たちは大人になって、伯父たちは皺が増えて、祖父は彼岸へ旅立った。

祖父の葬式は盛大だった。訪問客はひっきりなしに訪れて、心をこめて冥福を祈った。

翌日、あたしは車を借りて一人で天竜川に行った。道順は脳みそに浸み込まれていた。田舎とこの川はいつもセツトだったので、いてもたつてもいられなかったのと、もしかしたらミドリちゃんに会えるかもしれないと思ったからだ。

ミドリちゃんは、きつと寂しかったんだろう。ずっとずっと、一人ぼっちで。

あの時のあたしの行いは確かに卑怯だったけど、後悔していない。でも、どうにかして謝りたかった。それが自分のエゴだとしても。天竜川もまた、変わっていなかった。そういえば伯父が、一時期ダム建設の話が持ち上がったけれど、地元住民の猛反発にあって立ち

消えになったと話していたことを思い出した。

グッジョブ地元住民。

ここに人の手が入ったら、ミドリちゃんはどこに行けばいいのか。

「ミドリちゃん」

手にしていた袋がガサガサなった。中にはきゅうりが十本入っている。せめてもの貢物にスーパーで購入したものだ。

「ミドリちゃん、みきだよ。ずっとこなくてごめんね。会いたかったよ」

返事がない。澄んだせせらぎの中で、小鳥が呑気に鳴いているだけだ。

「ミドリちゃ……」

と、目の前流れる川から薄緑色の河童が顔を出した。キュンとつりあがった目が喜びに輝いている。ミニチュアの河童をだっこしている。

「ミドリちゃん！」

あたしは諸手を上げて駆けだした。

盆と正月には、あたしは必ず田舎に帰ることにしている。勿論、ミドリちゃんに会ったためだ。

望郷——フィールドオフゴールド

あの丘を越えれば懐かしい故郷へとたどり着く。
はやる気持ちとは裏腹に足は思い通りに動かない。
それでも男は齒を食いしばって前へと進む。
あの丘を越えれば。

男は農民だった。

田畑を耕し収穫を神に感謝する、どこにでもある石ころのような民。
妻をめとり子が生まれ、ささやかな幸せを甘受していた平凡な民だ
った。

永遠に続くはずの日常は、しかし戦の勃発で一転する。

鋤を持つべきはずの手に剣を、畑を踏むはずの足は屍しかばねを乗り越えた。

我らに正義ありと將軍たちは叫ぶ。

正義など知らんと男は泣く。

そんなものはどうでもいい、おれを帰してくれ。

あの美しい日常に返してくれ。

願いは届かず繰り返されるは阿鼻叫喚の地獄絵図。

暗闇の中で男は神に祈る。

おれを帰してくれ。

あの美しい日常に返してくれ。

胸を焦がす、焦燥にも似たこの望郷。

しかし神はうんともすんとも答えてくれぬ。

それどころか、とんでもない噂を与えてくれた。

男の故郷が壊滅したという。

黄金の原は焦土と化したという。

男は絶望した。神を憎んだ。

あなたを信じた結果がこれか。この仕打ちか。

神は相変わらず、うんともすんとも答えてくれぬ。

戦は始まりと同じように突如と終わった。
用無しとなった男は故郷へと向かう。

錆びた剣を杖に、動かない右足を引きずって歩くうちに小さな希望
が芽生えてきた。

もしかしたら。

もしかしたら。

神は自分をまだ見捨ててはいないのかもしれない。
高まる期待を宥めて男は歩く。

あの丘を越えれば、懐かしい故郷へと辿り着く。

ついに小高い丘を登りきった男の足が止まった。
その目から滂沱と涙が溢れる。

眼下に広がるは見渡す限りの黄金ヶ原——フィールドオブゴールド。

In the Bar

バー「オアシス」はJR日暮里駅の近くにある。看板を出していないので分かりにくいが、小粋なジャズがかかる大人の憩い場である。

黒くてシックな扉を開けると、止まり木に彼がいるのに気が付いた。彼はよく目立つ。なにしろ全国区で有名であるから。

「こんばんは」

隣に腰を下ろすと、彼はくしゃりと笑った（ように見えた）。

「久しぶりだな」

マスターにビールを注文して、カバンを床に下ろす。書類でパンパンに膨れた営業カバン。

カウンターを滑るように差し出されたビールに、彼は再会の意味を込めて、自分のグラスを小さく打ちつけた。中身はいつものスコッチダブルだろう。

器用に持つんだな。

気持ちよさそうな彼の手を見て、ぼくはぼんやりそんなことを考える。

「彼女とはうまくいったのか」

聞かれてぼくは赤面した。数カ月前のことだ。付き合って初めての修羅場を迎え、混乱し、かつ女の子特有の不安定さに辟易していたぼくは、かれに多いに愚痴つたらしい。らしい、というのはぐてんぐてんに酔っ払って記憶が曖昧だからだ。だけど、その時の彼の言葉ははっきりと覚えている。

「仕方ねえよ。女つてものはそういうものだ」

彼はグラスを傾けながら、静かに言った。

「女の面倒を楽しむのが男の甲斐性だ。ひきずられちゃあならねえ」
おお、成程。と非常に感銘を受けたぼくは、心の隅にきちきに折りたたんでいた余裕を引っ張り出して即ひるげ、それからラブラは密月状

態を継続している。

感謝してもし足りないくらいだ。以降、彼を尊敬している。

彼はテレビの中では愛くるしい表情を振りまくだけであったが、実際は非常に聡明で博学だということが分かった。口数は少ないが、共有している空気に親密さが含まれている。

それを一介のサラリーマン——しかも駆け出しのペーペーであるにもかかわらずにも向けてくれるのは、何よりも嬉しかった。

そもそも、彼がここにいることを、「オアシス」の常連は見ても見ぬふりをしている。誰も騒ぎ立てず、かといって馴れ馴れしくせず、よい距離感を保っていた。酔っ払って愚痴りたおしたのはよくらいである。ここに来るようになって、初めて「知っているけど、知らぬふりをして、その存在を好ましく放置している」大人の雰囲気素敵だと思った。きつと彼も心地良いから、ここにくるのだろう。

「あの、お子さんが生まれたそうですね。テレビで見ました、おめでとうございます」

「ありがとうございます」

彼は律義に礼を言っ、ふいに顔を顰めた。

「大騒ぎだったよ。立ち合いに大勢の人間がくるんだ。おれの女房はマリー・アントワネットじゃねえ」

そういえば、どのチャンネルでも同じニュースばかりだった。こういう時、ふいに彼——彼たちが可哀想になる。普通に暮らしているのに、絶えず好奇の目にさらされる閉塞感。それは彼らが望んだ訳ではないのだ。好き好んで海を渡った訳じゃあない。

しんみりした空気が流れた。彼のグラスの中の氷がカランとなった音がやけに大きく聞こえた。

「すまん、八つ当たりだ」

「いえ」

マスターに彼と同じものを頼んだ。ただし、シングルで、勿論チェイサー付きで。
その時だった。

黒い扉が乱暴に開いて、賑やかな笑い声が聞こえた。どうやら集団らしい。

誰かと談笑しながら店内に目を向けた、若そうな男が彼をみた瞬間、叫んだ。

「あつ、パンダがいる！」

店内の空気が凍った。

彼は身を固めたし、ぼくは茫然とした。常連客たちは雰囲気をぶち壊した若い男を殺気だった目で睨んでいる。その若い男も、自分の視界に入っているものが信じられない様に微動だにしなかった。

すべてが停止した中で、真っ先に動いたのはマスターである。ひらりと優雅にカウンターから出ると、扉の外へ出ていった。何やら話し合う声が聞こえる。

「あの兄ちゃんら、もうここにはこないよ」

斜交いの常連のおじさんがふくふく笑いながら彼に言った。

「ここは子供の遊び場じゃないからさ」

裸の王様、という童話がある。子供は正直に見たままを言う、教訓を説く童話だ。

でも、すべて正直に見たままを言ってしまうていいのだろうか、とぼくは思う。

善も悪も関係なく、ただ気付きつつも、そっと放置してくれる大人の狡さと優しさが必要な時もある。

そりゃ、ぼくだって始めは正直、驚いた。まさか、扉の向こうにパンダが人間のように座ってしゃべって、一丁前に酒飲んでいるなんて。普通、誰でも驚くだろう。幸いしたのは、ぼくがベロベロに酔っ払っており（酒を飲むと、大概、酒に飲まれるタイプである故）、横にいるのが立派な成人パンダでも「ま、いつか」と考えることを放棄したからである。

マスターが帰ってきた。一人で。

集団は帰ったらしい。

「ご迷惑おかけしました」

一礼して、再びカウンターの中へ戻った。

店内の客たちが無言で、賞賛とねぎらいの気配を寄こした。マスターが彼らに何を言ったのかは分からないが、常連のおじさんの言うように、もう二度とここには来ないだろう。

この店の雰囲気は心地よい。常連たちが築き上げた雰囲気がある。例え閉鎖的と言われそうとも、マスターはそれを全身全霊で死守しているのだろう。いつか霧散してしまうような儚いものだと知りつつも。

「お子さんの件なんですが」

スコッチを舐めながら、ぼくは言った。

「ニユースを見た時、自分のことのように嬉しかったです。ぼくだけじゃない、きっとこのお店の人たちも」

彼は濡れたような黒い瞳をゆっくり閉じた。

「ありがとう」

声に照れと嬉しさが混じっているのに気が付いて、ぼくまで気恥ずかしくなってしまった。

「お替わりなさいますか」

空になったグラスを見て、マスターが彼に聞いた。

「いや、もう帰るよ。ごちそうさん。いつも通り、上野にツケといてくれ」

彼はゆっくりスツールから立ち上がると

「じゃあな、ボウズ」

ぼくの頭を二度、優しく叩いて、扉の外へ消えた。二本の足でゆっくり歩いて。黒塗りの車がちらりと見えた。

「ボウズはやめてほしいって、何度もいっているのになあ」

頭に手を当てて唇を尖らすと、斜交いのおじさんが、またふくふくと笑った。

バー「オアシス」はJR日暮里駅の近くにある。看板を出していないので分かりにくいが、小粋なジャズがかかる大人の憩い場である。

たまにパンダがいる。静かにスコッチを舐めていたりする。
もし、目撃したとしても、どうか騒ぎ立てないでほしい。ただそっ
と見守るだけにとどめてほしい。ここは彼にとっても憩いの場なの
だから。

I n t h e B a r (後書き)

パンダの出産立ち会いに、そんなに人が集まるもんかなと思ったのですが、まあ雰囲気流してください（笑）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6479t/>

こんなはなし

2011年7月1日12時16分発行